

大分地方の庚申信仰について

岡 部 富久市

大分市周辺及び大分川流域の庚申信仰について、その受容と発展のあとと、現況を知る目的でこれまでいくつかの論稿をかいた。⁽¹⁾ 本稿はその最後の部分にあたる。今回の調査した地域は、大分市及び大分郡挾間町のほぼ全域にわたっている。⁽²⁾ 挾間町については、これを別の稿にゆずることも考えたが、整理の都合上本稿で扱うことにした。従って文中、大分地方という場合には挾間町を含んでいる。

一、大分地方の庚申信仰の現況について

(1) 大分市古国府の例

昔は庚申カンシチカの日が厳格に守られていたが、現在は春（三月か四月）と秋（九月か十月）二回の庚申カンシチカの日となっている。⁽³⁾ 講は十一軒で構成されており、座元は輪番で各戸をまわる。

ただ、座元に当っている家で、その年に不幸があった時は、その家をとび越して次の順番へ座元は移る。⁽⁴⁾

「庚申さま」の朝、座元に当った家は、「庚申さまにお参りして下さい。」と各戸を回り案内しながら、米三合をつないで歩く。都合が悪く出席できない家は、この時米を出さない。

出席できるのは昔は戸主に限られていたが、現在は各戸から一名だれでもよい。

「庚申さま」のおまつりは、夕方七時頃からはじめられるが、座元はその一時間位前に、前回の座元の家に「庚申さま」を

お迎えに行く。この時、前回の座元は当夜の座元に、おみあげとして甘いものを持って帰ってもらう。

このおみやげは家によって一定していないが、おはぎにすることが多い。

当夜は刻限が迫ると、講中の人々が座元の家へ集ってくるが、玄関口には容器に入った塩水が用意され、参加者はこれで手を洗い、そばにおいてある手ふきで手をふき、穢れを拭い去って座敷へ通る。

おまつりでは庚申様の「お社」と呼ばれる木造りの小社が床の間におかれ、参加者全員がこれに向って柏手を打ち全員の息災を祈り、あと直会となる。料理は、五日めし、尾頭つきの魚、煮メ、味噌汁、ナマス、シラエ、キンピラなどが出る。お神酒は一升だけで、お神酒代は参加者からその場で徴収する。「庚申さま」にはご飯をお供えするだけで、他の料理は供えない。 欲談しながら時を過し、午後十時頃には終る。

座元は、次の「庚申さま」まで、お社を大切に供養し、毎日ご飯をお供えするが、この容器は「庚申さま」と一緒に持ちまわりしているきめられたものを使用する。「庚申さま」は作の神と考えられている。なお、泊庚申は縁起がよい、という。

(大分市古国府三組 河野ヲソノ氏 明治35年3月6日生)

(2) 大分市上芹の例

上芹は二つの講組に分かれて「庚申さま」が行なわれている。この二つの講組は、真宗(十軒)と法華宗(十三軒)の別によるものである。

先ず、真宗門徒による「庚申さま」は、ウエヤル庚申の日に行なわれ、輪番で座前になる。参加者は、昔は男に限られていたが、現在は男女いずれでもよい。

「庚申さま」のおまつりは午後七時頃から始まり、午後十時には終る。

猿田彦神の掛軸をかけ、これにあずきご飯を鉢に盛って供え、(5)全員で念仏を口誦し「庚申さま」を供養する。これが終ると直会となり、参加者はお神酒をいただき料理をたべながら欲談する。

直会に出る料理は七品目⁽⁶⁾で、あえもの、煮付、吸物、酢もの、からあげなど。

「庚申さま」にお供えしたあずきご飯は、直会の時参加者全員が一箸ずつたべる。

経費はきめられた額を出席者から集金するが、不足分は全て座前の負担である。(大分市上戸 漆間つやの氏 大正3年10月1日生)

次に、上戸の法華宗信者による「庚申さま」は、現在十三軒の講組で行なわれている。

各戸は米一合を、「庚申さま」の当日座前に出すだけで、これ以外の負担はない。他の経費は全て座前の負担である。

おまつりでは、お題目と自我偈を唱えるだけで、これが終ると直会に移る。

(大分市上戸 漆間一夫氏 明治30年1月15日生 農業)

(3) 大分郡挾間町大字内成字詰の例

現在十一軒からなる講組があつて、60日毎の庚申カノエナルの日に輪番でおまつりをする。

参加者は、各戸から一人で男女を問わない。

「庚申さま」のおまつりは、夏は午後八時頃から午後十一時頃まで、冬では、これが少し早まり午後七時頃から午後十時頃までとなる。おまつりの始まる刻限の少し前に、前回の座前が来て、床の間に猿田彦神の掛軸をまつる。やがて刻限がくると「庚申さま」にお神酒と煮メを供え、参加者全員で「般若心経」をあげ供養する。これが終ると全員による直会となる。

(挾間町大字内成字詰三三二七 岡ミヤ子氏 大正15年9月7日生 農業)

以上の三つの事例をみたが、これらの事例に限らず、現在の「庚申さま」のまつりは以前のように、徹夜謹慎して息災を祈る、といった緊張感のただようようなものではなく、相互の親睦を目的とする至って開放的、娯楽的なものとなっている。

二、大分地方の庚申塔の造塔年代について

大分地方で最も古いものは、宝永五年(一七〇八)の奉待庚申塔(大分市滝尾津守)であり(写真1)、また最も新しいも

のは、大正七年（一九一八）造立の猿田彦大神の自然石塔（大分市滝尾津守九組）である。

最も古いものと、最も新しいものとの間には、約二百五十年間のへだたりがあり、この間に三十余の石塔、石像が造立されている。

これを年代分布でみると、一七〇〇年代に六体、一八〇〇年代に十五体、一九〇〇年代に一体となっており、一八〇〇年代にピークが見られる。（別表(1)参照）

また、これを造立された年号別にみると、文政四体、安政三體、宝暦、安永、文久、明治がそれぞれ二体、宝永、正徳、文化、天保万延、慶応、大正が各々一体ずつとなっている。（別表(2)参照）

以上のことから、造立年代のはっきりしているものにかぎってみれば、この地方における造塔のピークは、文政から文久に至る約四〇年間とみることができであろう。



〔写真1〕大分地方で最も古い庚申塔。

背丈程の雑草におおわれた小高い山の上であり、たどりつくのが大変である。ハゼの木の根元にあり北に向かって立てられている。

高さ約113cm巾約55cmの大きなもので、上部に種子があり中央に奉待庚申塔宝永五戊子天十月十八日の刻銘がある（大分市滝尾津守）

なお、造塔年代の調査にあたって、大分市大字古国府龍ヶ鼻岩屋寺の奉待上庚申尊塔（整理番号№6）については、単に己卯とだけしか刻銘がなく、造立年を推測するのは極めて困難であったが、造立の手法などから一応宝暦九年（一七五九）造立と推定した。

ところで、大分周辺及び大分川流域地方における地域別にみた造塔の初見は、鶴崎地方では寛永拾年（一六三三）の常行板屋の青面金剛像がそうであり、大分地方では宝永七年

別表(1) 年代別造立状況 (大分・挾間)

主尊 年代	庚申塔(文字陰刻)	青面金剛像	青面金剛塔 (文字陰刻)	猿田彦(大)神 (文字陰刻)	不 明	基数
1700	4	1			1	6
1800		6	4	5		15
1900				1		1
合 計	4	7	4	6	1	22

別表(2) 年号別造塔状況 (大分・挾間)

主尊 年号	庚申塔(文字陰刻)	青面金剛像	青面金剛塔 (文字陰刻)	猿田彦(大)神 (文字陰刻)	不 明	基数
宝 永	1					1
正 徳					1	1
宝 曆	2					2
安 永	1	1				2
文 化		1				1
文 政		2	1	1		4
天 保		1				1
安 政		1		2		3
万 延			1			1
文 久		1	1			2
慶 応		1				1
明 治				2		2
大 正				1		1
合 計	4	8	3	6	1	22

(一七〇八)の大分市滝尾津守の奉待庚申塔、野津原地方では、宝暦九年(一七五九)の野津原町本福宗の奉待青面金剛塔、庄内地方では、文政五年(一八二二)の庄内町透内青面金剛像となっている。大分周辺及び大分川流域地方について、造立年代の明確なもので上記を上回る古いものは現在までのところ報告されていない。

鶴崎地方では、寛永拾年造立の青面金剛像を最初として、在銘十二体のうち七五%にあたる九体が一七五〇年代以前の造立であり造塔の高まりが比較的早い時期にあったことを思わせる。

これに対して、大分地方では、約七三%にあたるものが一八〇〇年代以降に造立されており、時代的には鶴崎地方よりもかなり下ることがわかる。野津原地方は両者の中間に位する。

別表(5) 地方別造塔年代の推移

年代区分	地域区分					
	鶴崎	大分(狭間)	野津原	庄内	基数	
1600(慶長5)~1650(慶安3)	1				1	
1651(慶安4)~1700(元禄13)	2				2	
1701(元禄14)~1750(寛延3)	6	2			8	
1751(宝暦元)~1800(寛政12)	1	4	8		13	
1801(享和元)~1850(嘉永3)	1	6(1)	5	1	13	
1851(嘉永4)~1900(明治33)	1	9(1)		4	14	
1901(明治34)~1950(昭和25)		1	2		3	
1951(昭和26)			1		1	
合	計	12	22	16	5	55

別表(6) 年号別造塔状況

年号	地域	鶴崎	大分	野津原	庄内	合計
		寛貞	1			
貞享	2					2
元禄	1					1
宝暦			1			1
正徳			1			1
享保	3					3
延享	1					1
寛政	1		2	1		3
天明	1		2	5		7
安永				1		1
天文	1		1	2		4
文政			4	2	1	7
弘化			1			1
嘉永				1		1
安永			3		1	3
延久			1		2	4
文政			1			1
慶応	1		2		1	4
明治			1			1
大正						
昭和				3		3
計		12	22	16	5	55

庄内地方については、そのほとんどが一八五〇年代以降で、幕末に集中している。
(別表(5)、別表(6)、別表(7)参照)

三 形態的特徴について

別表(3)から明らかなように、石塔、石像の形態は板状船型、角柱型、自然石型が見られるが、駒型や笠付角柱型は一体もない。板状船型のもの、そのほとんどが青面金剛像である。大きさは様々であるが、小さいものは高さ五〇センチメートル位から、大きなものは高さ一五〇センチメートル近くのものである。材質はおおむね凝灰岩が用いられている。

別表(7) 主尊別造立年代の推移 (鶴崎及び大分川流域)

年代区分	主尊	庚申塔系	青面金剛像	青面金剛系	猿田彦神系	その他	基数
1600(慶長5)~1650(慶安3)			1				1
1651(慶安4)~1700(元禄13)						2	2
1701(元禄14)~1750(寛延3)		3	1	3		1	8
1751(宝暦元)~1800(寛政12)		4	8	1			13
1801(享和元)~1850(嘉永3)		1	8	2	2		13
1851(嘉永4)~1900(明治33)			6	2	5	1	14
1901(明治34)~1950(昭和25)			1		2		3
1951(昭和26)~		1					1
合	計	9	25	8	9	4	55

青面金剛像については、その相貌を「陀羅尼集經」の「大青面金剛大呪法」は詳しく説いているが、その中で説かれている正式の儀軌に沿ったものは一体もない。

大分市上野八組、金剛宝戒寺にある文化七年(一八二四)造立の青面金剛像は「八手の像」である。「青面金剛大呪法」では「一身四手」と説かれているが、全国的な刻像傾向は「六手」であるのが一般的なものとなっている中で「八手の像」というのは珍しいものといえる。正式な儀軌の二倍の手をもっている。

平野実氏は、青面金剛像のいろいろな形態を研究された結果、二手の像、四手の像、六手の像、八手の像について報告されているが、この「八手の像」は全国的にもあまり見られない例として紹介している。

この八手の青面金剛像に関して、大分郡庄内町奈良田の「八っ手庚申」は、その呼び名からして、あるいは八手の青面金剛像であったかも知れないが、現在では、損傷

別表(3) 主尊と形態 (大分・挟間)

主尊	形態	板状船型	角柱型	笠付角柱型	駒型	自然石型	基数
青面金剛像		9	1				10
青面金剛王尊						1	1
青面金剛王						2	2
大青面金剛						1	1
庚申尊			2				2
庚申塔						3	3
猿田彦(大)神像		2				6	8
猿田彦神像			1				1
主尊なし						6	6
合	計	11	4			19	34

がひどく、もとの姿を知ることが不可能である。

なお、宝戒寺のこの石像は、その台座正面に「青面金剛」と、主尊名を併せ陰刻してあることや、石像横に、「願主當村庚申講中」と刻み、青面金剛と庚申信仰との関係を明確に示していること、更に、塔上部に浅い廂をつけていることなど、全体的に入念で、ユニークなものといえよう。

四 主尊について

主尊別造塔状況については、大分地方では青面金剛系が全体の四〇%にあたる十四体で圧倒的に多い。

次が猿田彦神系で約三〇%、庚申塔系と自然石塔はその半分となっている。(別表(4)参照)。

主尊を造立年代からみると、青面金剛系は安永八年(一七七九)から慶応四年(一八六八)までの各時代に造立されており、年代的には比較的安定した位置を占めていることがわかる。

これに対して、対照的なのが庚申塔系と猿田彦神系である。

別表(1)から明らかのように、大分地方では庚申塔系は一七〇〇年代に限られており、一八〇〇年代以降には一体の造塔の例も見出せない。反対に、猿田彦神系は一八〇〇年代以前には皆無である。

猿田彦神系については、その造塔は江戸時代にも末期に多いことが平野実氏によって指摘されているが、大分地方でもその例外ではなく、安永期以前には一体の造立もない。この傾向は大分地方だけでなく、鶴崎及び大分川流域の各地方にもいいうることであり、最も古い猿田彦神系の造塔は、文化九年(一八一二)の猿田彦大明神塔(鶴崎大神宮境内)

別表(4) 主尊別造塔状況(大分・挾間)

主尊	地方区分			合計
	大分	挾間		
庚申塔(文字陰刻)	5			5
青面金剛塔(文字陰刻)	3	1		4
青面金剛像	9	1		10
猿田彦神塔(文字陰刻)	6	2		8
猿田彦神像	1			1
自然石塔		5		5
不明	1			1
合計	25	9		34

別表(8) 主尊別造塔状況

主尊	地域区分	鶴	崎	大分(挾間)	野津原	庄内	基数
庚申	塔(文字陰刻)	4		5	2		11
青面金剛像		8		10	30	12	60
青面金剛塔(文字陰刻)		5		4	1		10
猿彦(大)神塔(文字陰刻)		1		8	2	2	13
猿彦神像				1			1
梵天塔(文字陰刻)		1					1
帝釈天(文字陰刻)		1					1
南無妙法蓮華經塔(文字陰刻)		1					1
自然石塔(主尊なし)		5		5		3 4 か所	13 4 か所
不	明			1			1
		26		34	35	17	112 4 か所

である。

なお、主尊に青面金剛系が圧倒的であるのは、他の地域についても同様である。

別表(8)によれば、鶴崎及び大分川流域地方の一―二体の石像、石塔のうち約六〇％にあたる七〇体が青面金剛である。

次に、自然石塔に関しては、大分郡挾間町大字田代字不論迫の三基と同じく挾間町東行庚申の二基である。

いずれも60年毎の待上にあたって、供養塔として立てられたもの、といわれている。

挾間町東行庚申の自然石塔は、津留と稗田と呼ばれる田にはさまれた約五十歩程の肥沃な田んぼを前にした松と檜の茂った十五歩ばかりの小高い塚の上に立っている。このよく肥えた五十丁歩ばかりの田んぼを庚申と呼んでいるのは、作の神の「庚申さま」に因み、より豊饒を祈って名づけられたものであるうか。昔は、庚申の日には、おはぎなどを作って神前に供えていた。

上記の不論迫でも、東行でも、現在では、60年毎の待上供養塔の造立は行なわれていない。

挾間町不論迫 甲斐栄氏 明治44年12月5日生 農業
 挾間町東行 藤原みつの氏 明治40年5月21日生 農業

別表(4)の主尊不明一体というのは、大分市滝尾津守の正徳三年(一七一三)の



の長さ七咫」と記述されているが、この石像には突出した鼻はない。⁽¹⁰⁾

五 刻銘について

塔上部、塔中部、塔下部についてみると大体次のようである。

塔上部 種子

塔中部 庚申塔

奉待上庚申塔

奉待上庚申尊

奉待庚申塔

塔下部

岩屋寺⁽¹¹⁾

當村講中世話人

願主當村庚申講中

願主桑木村中

徳尾中

〔写真2〕猿田彦神像
突出した鼻はないが、八咫の鏡のような大きな眼をもっている。
(大分市上芹 熊野神社境内)

自然石塔のことで、塔下部に待人安部七良兵衛以下七名の名前が陰刻されていることから、造立当時はおそらく主尊名(庚申塔?)が塔表面に刻まれていたものと推測される。しかし、現在は損傷がひどく、事実を確認することは不可能である。従って分類上は主尊不明とした。

大分市上芹、熊野神社にある猿田彦神像はこれまでの唯一のものである。それだけに大変珍しくまた貴重な存在と思われる。

猿田彦命は「日本書紀」神代下によると、「その鼻

青面金剛王

青面金剛王尊

大青面金剛

奉待上猿田彦大神

猿田彦大神

佐る田彦大神

石塔上部に刻みこまれている種子とは、仏菩薩の像容を表わすかわりに、梵字を組み合わせて象徴的にそれを表わしたものである。大分市滝尾津守の奉待庚申塔には、その上部にカーン（不動明王）の種子がある。また、大分市田中町勝音院にある文久二年の青面金剛王塔には、上部にウーンの種子がある。大分市上宗方、植田大明神境内の庚申塔にも種子があるが判読が困難である。

碑面の種子は、風化による著しい損傷のために判読にあたってはいずれも難渋をきわめたが前記の二体については大分市上野、金剛宝戒寺副住職の宗尊幸氏の懇篤なご教示を頂いて解読することができた。

塔下部の刻銘については、右のものその他に待人の名前を刻んであるが、多いもので10名など多様である。

また、塔中央部に刻まれた主導に奉待上の文字を冠したのがあるが、この「待上」というのは60年ごとの庚申カノサルの年とか、三年一座といって庚申待を三年間連続してやり終えた時に一つの区切りとして庚申様をまつることをいい、この「待上」の時に供養塔として庚申塔が造立された。⁽¹³⁾

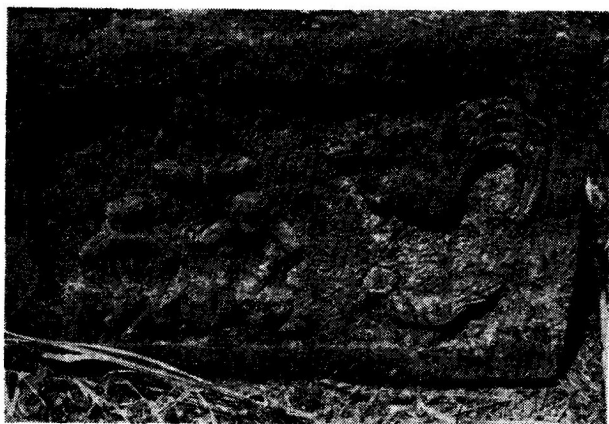
「待上」をはっきり示している石塔は、大分地方の上野（一体）、古国府（三体）滝尾津守（一体）にみられるが、他の地方では見られない。特に、大分市滝尾津守の自然石塔は碑面に「六拾老年待上之塔」と陰刻し、61年目の「待上」をはっきり示している例である。

これ以外では、大分郡庄内町袋では61年目の待上の時に61基の自然石を立てた例、前記大分郡挾間町大字田代字不論迫、同じく挾間町東行の60年毎の待上の時に自然石塔を立てた、という事例の外は、庚申塔と待上の関係を物語る材料は特にない。もっとも、石塔の造立は、庚申の講の組織が成立した時などにも行なわれており、「待上」の時だけに限るものではないことは、すでに他の稿でのべたとおりである。いずれにしても造塔に要する経費は大きく、講中の負担は重かったものと想像される。

六 青面金剛像の付随物

日輪・月輪・鶏・猿・童子・邪鬼など青面金剛像の付随物は多様である。その組合せを示すと次の通りである。

付随物	整理番号	基数
猿(左) 鶏(右)	No. 15	1
月輪(左) 日輪(右)	No. 5 No. 6 No. 35	3
雄鶏(左) 雌鶏(右) 邪鬼	No. 1	1
童子(左・右) 三猿	No. 34	1
三猿(左) 雄鶏(上) 雌鶏(下)	No. 20	1
鶏(左) 猿(右) 邪鬼二匹(中央) 光背	No. 19	1



【写真3】

限られたスペースに三猿と鶏をうまく配している。ユーモラスな雄鶏の姿が印象的である。
(大分市岡川字秋岡庚申森)

右に示した種々の付随物の中には造型的に秀れたものが沢山ある。(写真3)

以上、いくつかの項目について大分地方の庚申信仰の特色を瞥見してきたが、最後に、大分地方に現存している塔のうち、形態的に特筆すべきものを二つ紹介して本稿を終る。

一つは、大分市玉沢の青面金剛像で、これは極めて高い造塔技術を示すものであり、造型的にもスマートであり注目してよい。

他の一つは、大分市滝尾津守の宝永五年(一七〇八)造立の奉待庚申塔で、古拙の風格をもつものである。(写真1)

註(1)「野津原地方の庚申信仰」(『大分県地方史』61号)

「鶴崎地方の庚申信仰について」(『大分県地方史』78号)

「大分郡庄内地方の庚申信仰について」(『大分県地方史』91号)

(2)大分市の場合、調査地域を地区及び校区で示すと次の通とである。

大分地区(金池、荷場、長浜、中島、住吉、春日、大道、八幡、南大分、滝尾

津留、東大分、日岡)

植田地区(植田、東植田、寒田、敷戸、賀来)

狭間町の場合、調査地域を大字で示すと次の通りである。

下市、北方、狭間、向原、鬼瀬、時松、谷、小野、筒口、鬼崎、篠原、内成、田代、来鉢、七蔵司、高崎、三船、古野、赤野、朴木

(3)庚申まつりを年2回にまとめて行なう事例はいくつかあるが、大分市向原東二丁目の十九軒からなる講組では、昔は60日毎の庚申の日に

やっていたが現在では、年が明けて最初の庚申の日（初庚申）と、その年最後の庚申の日（乙庚申）の二回にしている。（牧キヌエ氏大正3年3月10日生）

(4) 一家から死者が出た場合、これを「黒不浄」といって忌む地方が全国的にはかなりあり、古国府の事例もこれに属する。

逆に、出産のあった家を「赤不浄」といって、やはり「庚申さま」のまつりは次の座元に移して行なうところがある。

(5) 平野実氏の研究によると、現在講を行なっているところで、その日に小豆飯を供えたり、食べたりするところがある。（平野実「庚申信仰」一〇四頁角川書店）

窪徳忠「庚申信仰の研究」年譜篇、「言経脚記」天正十七年五月十四日庚申の記述に「赤粥振舞了」の一文があるが平野実氏は、この「赤粥」についても前記著書の中で考察を加えられている。

(6) 七という数字と庚申信仰の関係が深いことはすでに多くの研究者によって明らかにされている。

上芹のこの事例でも、料理の品数が七品であるということは、例えば、「庚申さま」には七色菓子というのと同じような感覚で受け入れられてきたものと思われる。

料理の内容自体は時代の流れの中で変化したと考えられるが、その中において七という品数だけは現在まで守られて来たものであろう。

窪徳忠「庚申信仰と「七」（庚申懇話会編「庚申」七六頁）

(7) 小花波平六氏は法華宗の庚申待の特徴として、法華題目や自我偈などを唱えたりすることゝならんで、法華經の寿量品や方便品などを誦するのが一般的な動行の姿であることを明らかにしておられる。

小花波平六「日蓮宗と庚申信仰」（庚申懇話会篇「庚申」二一九頁）

(8) 拙稿「大分郡庄内地方の庚申信仰について」（「大分県地方史（九一号）二四頁）

青面金剛像の相貌が正式の儀軌から外れているものがほとんどであることは本文でのべたが、「二手」の例としては大分郡野津原町船平の昭和十三年造立のものが一体だけである。

また、「四手」の例としては、大分市鶴崎下徳丸にある青面金剛像が一体だけである。

(9) 平野実著「庚申信仰」角川書店五一頁

(10) 猿田彦神について「日本書紀」神代下に次のような記述が見える「有一神、居天八達之衢。其鼻長七咫、背長七尺餘。當言七尋。且口尻明耀。眼如八咫鏡、而皦然似赤酸醬也。」（傍線筆者）「日本書紀上」神代下一四七～一四九頁（日本古典文学大系67）岩波書店

(11) 岩屋寺というのはは寺号ではなく、かつて上野にあった講の名前である。

(12) 大分郡野津原町石合では、32回目の「庚申さま」のまつりを「待上」といって、他の「庚申さま」よりも盛大におまつりした。当日は徹夜はしないまでも、神職を招いたりして、座前の家で深夜まで過ごし、次の日も早朝から参集しておまつりを続けた。待上の日には庚申さま団子を作って、翌朝全参加者に配って祝った。

（野津原町今市石合秋吉辰男氏明治23年9月23日生農業）

(13) 窪 徳忠「庚申塔造立の意義とその変遷」（庚申懇話会篇「庚申」一六四頁）

平野実「庚申信仰」四〇頁角川書店

(14) 拙稿「大分郡庄内地方の庚申信仰について」（大分県地方史91号）

付 記

本稿を脱稿してから、次の石像を調査する機会をもったので付記する。

その第一は、大分市王子山の手町九組にある、萬延元庚申年（一八六〇）八月吉日建之の銘がある猿田彦神像である。

この石像は、山寄りの道端に突出した岩上に立っており、板状船型の約二メートル三〇センチにも及ぶ巨大なものである。尊像部分は、約一六一センチメートルの立像で、鬚をたくわえ、剣を手挟み、杖を握っている。

石像下部の台座には、世話人ヒコヤ勇作、〇クブ源助の陰刻がある。また、猿田彦神像の頭上には円形の日輪、月輪が浮彫りされており、それらは極めて鮮やかな朱色が塗られている。

大分地方に於ける造塔状況

整理 №	塔 名	所 在 地	造 立 年 号	刻銘、付随物など
1	青面金剛像	大分市上野8組 宝戒寺	文政七甲申歲 閏八月建立焉	願主當村庚申講中 邪鬼雄鶏(左) 猿(右)
2	大青面金剛	〃	万延元年 庚申十二月	なし
3	奉待上猿田彦 大神安鎮	大分市上野 円寿寺	文政九 正月廿六日	岩屋寺
4	奉待上庚申塔	大分市大字古国府 龍ヶ鼻(石仏窟隣)	なし	なし
5	奉待上庚申塔	大分市大字古国府 龍ヶ鼻岩屋寺(石仏前)	甲宝曆十四年 申三月〇日	日輪、月輪
6	奉待上庚申尊	大分市大字古国府 龍ヶ鼻岩屋寺(石仏前)	己(右)卯(左)	日輪、月輪
7	猿田彦大神	大分市大字古国府4組	安政六己未〇 十二月吉日	なし
8	猿田彦大神	大分市大字古国府11組 インニヤク社内	なし	なし
9	青面金剛王	大分市田中町8組の3 勝音院	文久二〇〇 二月初二日	種子
10	青面金剛王	〃	皆文政九丙戌天 二月初八日	當村講中
11	奉待庚申塔	大分市滝尾津守庚申山	宝永五戊子天 十月十八日	種子、待人
12	自然石塔	〃	正徳三癸己	待人
13	猿田彦大神	大分市滝尾津守9組	大正七年拾壹月 建設	午六拾老年待上之 塔 待人
14	青面金剛像	大分市下宗方奥組	文久二酉五年 庚申月	なし
15	青面金剛像	〃	天保十亥 十一月 日	いわぎる(左) 鶏(右)
16	猿田彦大神	大分市下宗方 田代屋敷	安政三〇〇 〇〇正月〇	待人
17	庚申塔	大分市上宗方 植田大明神境内	安永四乙未 正月祭祀日	種子、待人
18	猿田彦神像	大分市上戸 熊野神社境内	なし	なし
19	青面金剛像	大分市玉沢146	安政二卯年 四月吉日	願主兼木村中 トリ(左)猿(右) 光背、邪鬼2匹
20	青面金剛像	大分市岡川字秋岡 庚申森	なし	邪鬼、雄鶏 三猿、雌鶏
21	青面金剛像	大分市岡川字秋岡 徳尾 大友頼泰墓所内	安永八己亥 六月良且	徳尾中
22	青面金剛像	大分市大字奥田57	慶応四戊辰 四月十六日	大作
23	青面金剛像	大分市国分字上条 国分寺境内	文化十酉 四月廿三日	待人
24	佐る田彦大神	大分市国分紺屋の久保	明治廿九庚申年 冬霜月廿九日	なし
25	青面金剛像	大分市上八幡二組	なし	なし

大分郡挾間町に於ける造塔状況

整理 №	塔名	所在地	造立年号	刻銘付随物他
26	自然石塔	大分郡挾間町 東行庚申	なし	なし
27	〃	〃	なし	なし
28	猿田彦大神	大分郡挾間町大字内成 字詰3327	明治廿四卯二月 吉祥日発願施○	望月高德
29	〃	〃	なし	なし
30	自然石塔	大分郡挾間町大字田代 字不諭迫	なし	なし
31	〃	〃	なし	なし
32	〃	〃	なし	なし
33	青面金剛像	大分郡挾間町奥詰	なし	三猿童子
34	青面金剛王尊	大分郡挾間町 鬼ヶ瀬歳神社境内	千時文政十二 正月二十日	日輪、月輪 (右) (左)

第二に、大分市滝尾、碓島の熊野神社境内にある青面金剛塔一体。神楽殿裏に、横倒しになっている。

石塔上部が破損しているため、種子が半分欠けている。

塔中央に、奉建立青面金剛尊塔、元禄十四天（一七〇一）二月二日の刻銘がある。

下部には六人の侍人が陰刻されているが、判読できない。高さは、約九十五センチメートル。

本文で、大分地方で最も古い石塔として、宝永五年（一七〇八）の大分市津守庚申山の、奉待庚申塔を示したが、その地位は、この元禄十四年の奉建立青面金剛尊塔にとってかわられることになる。

しかし、このことによって本文中の分析、推論が訂正されることはない。

第三に、刻像年不詳の青面金剛像二体が、大分市曲、曲神社裏手の山際にあり、小野ツギエ氏によって大切に供養されている。

大分鶴崎高等学校